

焼成部は、平面形などでは他地域とほぼ同様の形態を示すが、非常に幅広であるという点と、床面の傾斜の角度とその変化の2点で異なっている。長さと幅の比率についてみると、他地域の窯跡では3.0:1~4.2:1程度であるのに対して、一本杉窯跡群では2.2:1~3.0:1となっている。常滑窯においては、「13世紀の前半(5型式期)から焼成部の長大化が進み、後半(6a型式期)になるとより大型化傾向が進展した」ことが指摘されている(中野:1995)。具体的には、常滑などでは窯体が長くなり、一方、一本杉窯跡では幅が広くなるという方向に進んでいる。

次に床面の傾斜についてみてみると、一本杉窯跡群ではI~III群の時期には30°程であり、IV群の時期には38°と傾斜が急になる。これに対して、常滑窯では多くのものが20°程度で、越前の水上・上長佐、越後の狼沢・赤坂山や東北南部の熊狩・大戸・八郎などの諸窯では常滑窯よりも若干急角度であるが20~30°の範囲に収まっており、一本杉窯跡群の特異性がうかがわれる。また、常滑窯では前述した窯体の長大化に伴い生産性と作業効率の向上をはかるため焼成部床面の傾斜はしだいに緩やかになっているが、一本杉窯跡群ではIV群の時期に急角度になり、常滑窯とは異なる変遷をたどっている。これは、常滑窯が比較的緩斜面の丘陵地に立地しており長大化が可能だったのに対して、一本杉窯跡群では尾根の上部の傾斜がきつい場所に築窯せざるを得なかつたという地形的な制約が主な要因と考えられる。

こうしてみると、一本杉窯跡群は瓷器系中世陶器窯跡としての基本的な構造や平面形などでは常滑窯の特徴と類似する点が多く認められるものの、各部位ごとの構造(分焰柱の形状や傾斜変換線の位置)や大型化の方向性、焼成部の傾斜の変遷などで異なる点も多くみられる。一方、越前・越後をはじめ東北南部の諸窯とは共通する要素が多くみられる。

(4) 窯詰めの状況

検出された窯跡の中で窯詰めの状況の分かるものは、製品のかなりの量が原位置を保った状態で検出されたS R-20窯跡2次面のほかに、焼台の痕跡から窯詰めの状況が推定することができるS R-11窯跡1次面、S R-14窯跡1次面、S R-15窯跡4・8次面、S R-17窯跡2次面、S R-18窯跡3次面、S R-19窯跡2次面の合計7基8面である。

S R-20窯跡は甕・擂鉢を主体に焼成した窯跡である。焼成中に分焰柱付近の天井部が崩落しており甕6個、擂鉢18個、壺2個の位置が特定できた(第103図)。なお、これら以外の製品は搬出されたと考えられる。

甕は3段分検出されており、下段の甕f、中段の甕c・d・e、上段の甕a・bがある。また、上段の甕bの東側では大形の焼台が検出されており、製品は検出されなかつたものの、ここにも甕が置かれていたと推定できる(甕g)。このことから中・上段では一段に3個ずつ並べて焼かれていたことになる。これらの甕の配置についてみると、甕a・cは西壁に、甕e・gは東壁に沿って並べられているのに対して、中間に位置する甕b・d・fはいずれも中心から東西にずれた位置に置かれており、「く」字形を呈している。

擂鉢は8ヶ所から18個出土しており、擂鉢bでは7個、擂鉢cでは5個、擂鉢f・gでは2個の重

ね焼きが行なわれている。擂鉢の置かれている場所は、大きく分けると分焰柱の直後と甕の2段目付近の2ヶ所あり、特に後者では甕d・e間の120cmほどの隙間に集中している(6ヶ所15個)。この他、甕c・d間と甕d・f間から小形の焼台が検出されており、本来はここにも擂鉢が置かれていたものと考えられる。これらの様子からみると、擂鉢は、全体に均一に規則的に並べられたというよりも、甕を配置した際にできた空間(隙間)を充填するように並べられたものであると考えられる。

窯内での製品の固定方法であるが、すべての製品を除去したところ、それぞれについて床面に貼り付いた状態で焼台が検出された。焼台はいわゆる「馬爪形焼台」と呼ばれるもので、径が15~20cmの大形のものと、5~10cmの小形のものとがあり、甕などの大形品には大形のものを、擂鉢などの小型品には小型のものを用いている。焼台はすべて2個1対で使用されており、製品を載せる際には台と製品の間には陶器片が挟まれている。

次に、SR-14 窯跡1次面、SR-15 窯跡4次面、SR-17 窯跡2次面、SR-18 窯跡3次面、SR-19 窯跡2次面についてみてみる。

これらの窯跡はいずれも甕・擂鉢を主体に焼成している窯跡で、焼成部の斜面の部分から直径15~20cmの大形の焼台痕の列が3列検出されている。その配置をみると、外側の2列は両側壁に平行して直線的に並ぶのに対して、中間に位置するものは左右にずらしてジグザグに置かれている。また、列の中での個々の並びについてみると、窯体の狭い部分では外側の製品はそれぞれ同じ高さ(段)に揃えて並べられているのに対して、中間に位置するものはこれらの段の中間になるように高さをずらして、同一の段で3個横並びにならないように配置されている。一方、焼成部下方の傾斜変換線付近で窯体の広い部分については間の列が2列になるもの(1段に4個並べられたもの)も認められる(SR-18 窯跡)。

また、これらの窯跡からは小形の焼台痕もいくつか検出されており、大形品の隙間に配置されている。

このような窯詰めの状態は前述したSR-20 窯跡2次面とほぼ共通するもので、基本的には甕などの大形品を規則的に配置して、その際にできた隙間の部分を充填するような位置に擂鉢などの小形品が置かれたものと考えられる。

一方、SR-15 窯跡8次面では径15~20cmの大形の焼台痕6ヶ所と、5~10cmの小形の焼台痕37ヶ所が検出されている。大形の焼台痕は側壁に沿うように2列認められており、焼成部の中程まで5段分検出されている。一方、小形の焼台痕はこれ以外の部分の全域で検出されており、大形のものとは異なり不規則に分布している。壁際に大形の製品を規則的に並べ、その他の部分を充填するように小形品が配置されているという点では他の窯跡の窯詰めの状況と同じであるが、大形品を少なくしてその分小形品を多く焼成している点で他と異なっている。同一の窯跡においても操業面によって異なる組成・構成比で製品が焼かれていたものとして注目される。

次に、1回の操業でどれだけの製品が焼かれていたかを考えてみる。なお、この場合、焼台の位置から製品の窯詰めの様子が推定できるのは、規則的に配置されている大形品(甕など)のみであることから、ここでは大形品を対象とする。

まず、焼成部の中で大形品がどの場所に置かれていたのか考えてみる。製品の置かれた上限については、S R-11 窯跡 1 次面や S R-17 窯跡 2 次面、S R-19 窯跡 2 次面では、煙道部との境界付近まで焼台痕が確認されており、焼成部の上端まで窯詰めされていたものと考えられる。一方、下限については、S R-14 窯跡では、焼成部の平坦部（通焰孔付近）で直径 30cm ほどの青変した部分が確認されており、製品を置いた痕跡と考えられ、S R-08 窯跡では分焰柱の側壁に融着した甕の体部破片が検出されており、この部分にも製品が置かれたことは明らかである。したがって、製品（大形品）は焼成部全面に置かれたものと推定される。

こういった前提にたつと、S R-15 窯跡 4 次面では、焼成部の斜面の部分で焼台痕が約 80cm 間隔で 6 段確認されており、焼台痕の検出されなかった部分についても同様の間隔で窯詰めされていたとすれば 9~11 段並ぶことになる。また、焼成部の平坦部では S R-14 窯跡 1 次面の状況から 6 個程度置かれたと推察され、S R-15 窯跡 4 次面全体では 35 個程度焼かれていたものと考えられる。同様に S R-17 窯跡では、9~13 段並び全体で 44 個程度、S R-19 窯跡では 7~9 段で全体で 32 個程度焼かれたものと考えられる。したがって、大形品は通常一回の操業で 30~40 個程が焼かれたものと推定される。

一方、大型品が少なく小形品が多い S R-15 窯跡の 8 次面では、大形品は焼成部の下半を中心に 22 個程度と推定される。

なお、小形品は、窯詰めの状況から大型品より少なかったとは考えにくい。小形品としては壺・擂鉢などがあるが、擂鉢は S R-20 窯跡では最高で 7 個の重ね焼きが認められており、1 回の操業で焼かれていた擂鉢は、かなりの数にのぼるものと考えられる。

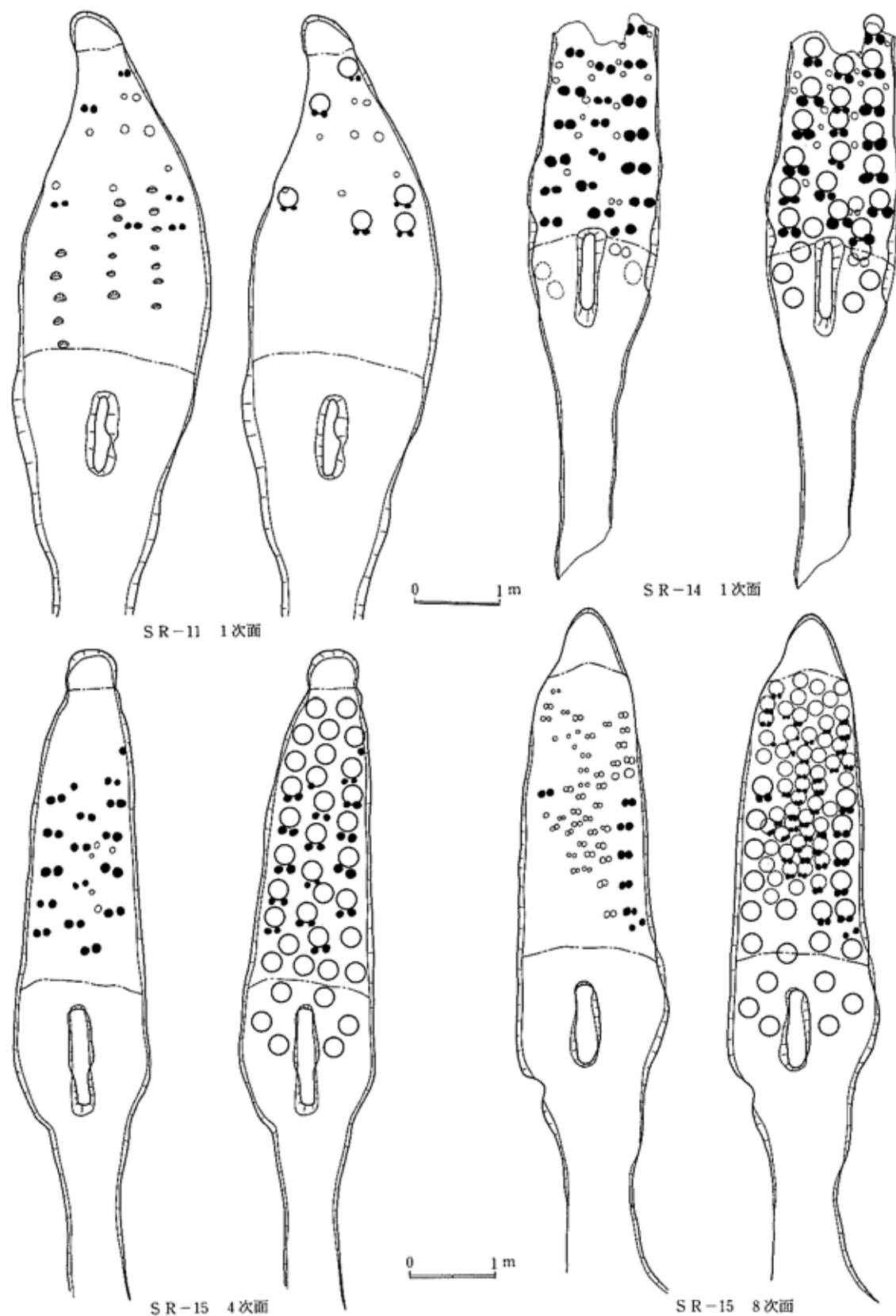
他の窯跡で窯詰めの状況が推察できるものには、筑館町熊狩窯 A2 号窯跡がある。この窯跡の焼成部下半から甕・擂鉢・壺・皿などが多量に出土し、床面に貼りついた状態の馬爪形焼台や、これが剥離した際の痕跡が多数検出されたことから、窯詰めの状態が推察されている（藤沼他：1979）。

これによれば、甕は両側壁に沿って 1 列ずつ並べられ、しかも同じ高さで 2 個が横並びにならないように高さをずらして配置されている。一方、擂鉢・壺・皿などの小形品は甕と甕との隙間の部分から出土している。

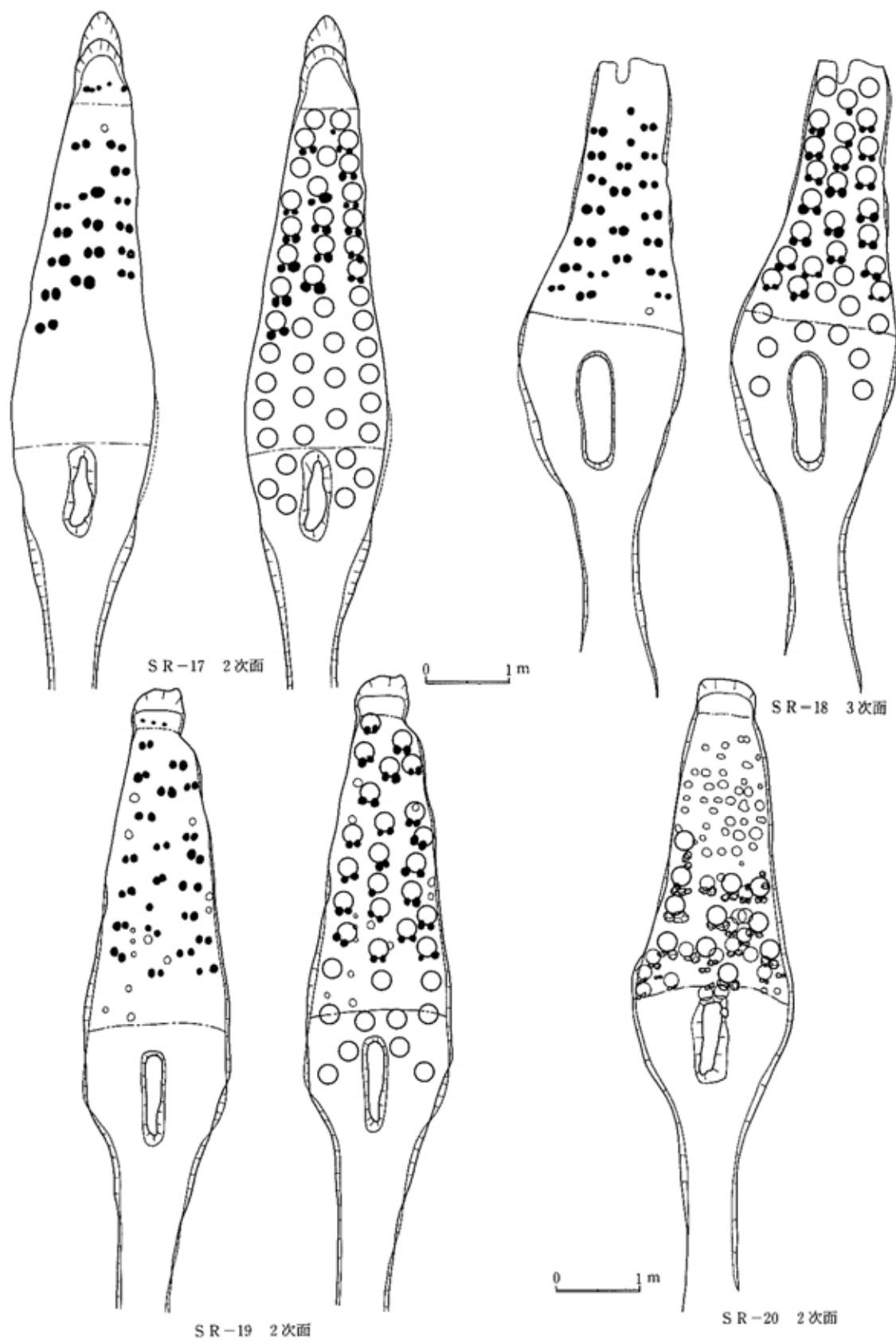
両窯跡間の窯詰めの方法について比較してみると、大形品を窯壁に沿って規則的に配置し、その隙間を擂鉢・壺・皿などの小形品で充填していくという方法は共通のものであり、基本的には同様の窯詰めが行なわれたものと考えられる。一方、熊狩窯では甕の配列が 2 列である点が一本杉窯跡群のものと異なるが、このことは窯体の規模（焼成部の幅）に起因するものであり本質的な差異とは考えられない。また、擂鉢は熊狩窯では重ね焼きが行なわれていないのに対して、一本杉窯跡群では行なわれているという点で相違がみられる。

2. 遺物について

一本杉窯跡群の出土遺物には、陶器（甕・壺・擂鉢・火鉢）・陶硯・陶錘・焼台があり、この中で出土量の大半を占めるのは甕・壺・擂鉢である。ここではそれらの遺物について分類し、検討を加える。



第125図 窟詰めの様子 (模式図)



第126図 窪詰めの様子 (模式図)